

縛られてはじめて分かった

## 恐怖、怒り、屈辱感

群馬県沼田市を拠点とする大誠会グループは、約25年にわたり身体拘束ゼロを実践しています。同グループでは、事務職や調理員を含む全職種が、パート職員も含め全員受講するという身体拘束体験型研修に、私も参加しました。（平岩千代子）



### 縛られるということ

いったい何が起きたのか——。身体拘束体験研修だと頭ではわかっているのに、いきなり手をつかまれ、車いすに縛られそうになった瞬間、私は強い動揺と混乱に襲われました。あまりにもショックで、声が出ない。ふと我に返ったときには、「やめて！何をするの！」と大声で叫びたかった。そして、縛ろうとする人の手を全力で振り払い、その場から逃げ出したかったです。

車いすに縛られた両手両足。頭に浮かぶのは、どうやったら解けるか、ただそれだけでした。縛られると解き、また縛られては解く、その繰り返しでした。すると今度はY字型ベルトでも固定され、拘束は徐々に強くなる。それでもなお、何とか解こうと必死になる私。もがけばもがくほど紐は手首に食い込み、手の甲は紫色に変わり、バンバンに腫れていきました。

これはまずい。私はどうなってしまうのだろう。  
何ができるのだろう。

ベッド欄に両手両足を縛られると、股間が大きく開いた状態が続きました。掛け布団をかけられていても感じる強い恥ずかしさとみじめさ。なぜこんなことをされるのか。目に入るのは真っ白な天井だけ。「じっとして」としか言わないスタッフ。人として扱われていないという、深い屈辱感がこみ上げました。



もしこれが、自分では決して解くことのできないマグネット式の拘束具によるものだったら。もし、抵抗する気力を失い、縛られることを受け入れてしまったら……。



### 知られざる拘束の代償

車いす上で30分、ベッド上で15分。車いすに縛られた紐は解くことができました。けれど、ベッドでは最後まで解けませんでした。

今回一緒に研修を受けた、大学病院に勤務し、自らも身体拘束をした経験のあるナースの言葉が、今も胸に刺さっています。「縛ったことがある医療・ケア職こそ、この体験研修を受ける意義が大きい」。縛った経験のある人が、縛られる人の苦痛や屈辱を自らの身体感覚として知ってこそ、「もう二度と縛りたくない」という強い動機づけになるというのです。

医療安全の専門家である長尾能雅・名古屋大学教授は、「身体拘束は安全性が保障されないハイリスクな医療行為」であることを患者に説明すべきだと指摘しています。



たとえ認知症になっても、縛られる不安におびえることなく、安心して入院できる社会であってほしい。

けれど、今日も、多くの人が病院のベッドに縛られています。その中に、いつかあなた自身がいるかもしれません。